

# 一 橋 大 学 哲 学 会 報

一 橋 大 学 哲 学 ・ 社 会 思 想 学 会 会 報 No. 21  
(「研究会便り」より通算第49号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会  
発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局 tel./fax 042-580-8644  
〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内  
Email: phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp

URL : [http://www.soc.hit-u.ac.jp/~soc\\_thought/index.htm](http://www.soc.hit-u.ac.jp/~soc_thought/index.htm)

## 第18回一橋大学哲学・社会思想学会

(研究会より通算第48回)

【日 時】 2015年11月29日(日) 10:30 開場

【場 所】 一橋大学 東キャンパス第三研究館三階 研究会議室

【個人研究発表】 11:00~15:10

11:00~12:00

堀永 哲史(本学社会学研究科修士課程)

「ヘーゲル『大論理学』(第二版)「定在」における無限論」

司会 大河内 泰樹

13:10~14:10

志田 圭将(本学言語社会研究科修士課程)

「アドルノにおける交換の批判と、交換されえないもののあり方について」

司会 府川 純一郎

14:10~15:10

小島 雅史(本学社会学研究科修士課程)

「フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』における生活世界と主観性の構造の関連について」

司会 村田 憲郎 (東海大学)

**【特別報告】**

**15:30～17:30**

**「40年の研究生生活を回顧する」**

**平子 友長（社会学研究科特任教授）**

**司会・特定質問者 佐山 圭司 准教授（北海道教育大学）**

**【懇親会】 18:00～ はたご屋 会費実費**

**【目次】**

個人研究発表 レジюме（堀永 哲史）	3 頁
個人研究発表 レジюме（志田 圭将）	4 頁
個人研究発表 レジюме（小島 雅史）	5 頁
前回個人研究発表 まとめ（野末 和夢）	6 頁
前回個人研究発表 まとめ（國本 哲史）	7 頁
前回個人研究発表 まとめ（鈴木 慧）	8 頁
前回講演会 まとめ	9 頁
平子友長先生の研究業績	12 頁
一橋大学哲学・社会思想学会個人研究発表募集のご案内	17 頁

「ヘーゲル『大論理学』（第二版）「定在」における無限論」

堀永 哲史（本学社会学研究科修士課程）

本発表ではヘーゲルの『大論理学』、有論（第二版）の定在章における無限を論じる（以下「無限論」と呼ぶ）。通例、無限を論じる際に主題となるのは、有限と無限の二者だけである。しかしヘーゲルは、たんに有限なものに対置されそれゆえ有限であるにすぎない無限なものを悪無限であるとし、さらにその悪無限から区別された真無限を導入する。ただただ悪無限を退ければよいのではなく、むしろ悪無限的な無限進行の最中にのみ真無限は把握されうる。その場合にのみ、真無限の二つの契機である有限なものと悪無限とは区別されながら真無限のうちに統一されていること、そして両契機が運動することで全体としての真無限もまた運動であることが正確に掴まれうる。

真無限を正確に把握する際に難所となるのは、無限進行から真無限への転換点である。この転換点を見極めるために注目するのは<在り方>である。つまりさしあたり各々<それだけで存立する>とされている有限なものと悪無限とが、ヘーゲルによる批判的叙述を経て、その真相においてどのような在り方をしているのかに注目する。

また本発表では冒頭で次の二つの問いを提起する。第一の問いは「有限なものほどどのようにして自己から外へ超え出て無限なものへと至るか」であり、第二の問いは「無限なものほどどのようにして自己から外へ超え出て有限なものへと至るか」である。第一の問いは、さしあたり有限なもののみがあるなかで無限なものへと至ろうとする際に生じる。しかし有限なものと無限なものとを隔絶させるかぎり、無限なものは有限なものにとって彼岸にとどまり続けるので、この問いに答えることはできない。第二の問いは無限性のなかに有限性の原理をどのように組み込むかという問題である。この問題は、ヘーゲルだけでなく、同時代のフィヒテやシェリングらにも共有されていた問題であった。しかしシェリングは無限なものから有限なものへの移行が一切の哲学の問題としながらも、この問題は解きえないものとした。これに対して、ヘーゲルはこの問いに回答を出す。ただしその回答の仕方は、この問いが持つ前提、すなわち有限なものと無限なものとを隔絶させ、各々をそれだけで存立するものと見なす前提が、無限なものを有限化してしまっていることを暴露し、問いそのものを否定するというようである。

真無限を把握することで明らかになることは、真無限にとって有限なものは存在しなくてもよいものではなく、むしろ真無限の契機として積極的な存在意義を持つことである。したがってヘーゲルの無限論を論じることによって、それだけではまだ不完全ではあるにせよ、われわれ人間を含む有限なものの存在の根拠を示すことができるだろう。

以上の論点を踏まえ、本発表ではヘーゲルの論述の順序に可能なかぎり従いながら、これまで論じられることの少なかった無限論の細部にまで立ち入り、真無限の正確な把握を試みる。

「アドルノにおける交換の批判と、交換されえないもののあり方について」

志田 圭将（本学言語社会研究科修士課程）

交換されえないものはあるはずだという確信と、交換されえないものなどないのではないかという疑念が、アドルノの思想においてどのような仕方で両立しているのか。そして、交換されえないものがあるとしたら、それはどのような仕方でありうるのか。このことを明らかにするのが本報告の目的である。

アドルノは、等価交換の批判というかたちで、同一化の働きを批判する。アドルノが批判する同一化の働きとは、ある対象を概念へと包摂すること、そのことを通じて別の対象と等置することである。同一化の働きに対するアドルノの徹底的な批判（Kritik）は、交換されえないもの・かけがえのないものがこの世にはあるのだというアドルノの信念を示している。同時に、交換されえないものなどないのではないかという疑念こそが、同一化の働きに対する原理的な検討（Kritik）をアドルノに課している。

アドルノによれば、等価交換は人を個体化・主体化し、人間の認識を条件づける。等価交換によって規定された社会では、本質的に、人は交換者として、物は交換対象として現れる。このとき、人は抽象的で自律的な交換主体であり、物は交換対象として質を失った状態にある。それが誰であるか、それが何であるかはどうでもよい *gleichgültig*。あらゆるものに等しく *gleich* 妥当する *gültig* 交換原理が、社会のあり方を形作る。

等価交換によって規定された社会は、無関心 *gleichgültig* な社会である。これに対して、関心をもつという態度、何かに対して情熱的に関わるという態度は、いわば物の質を蘇らせる。例えば、「ほかでもないあなた」に向けられる愛という情緒的關係は、質的なものへの固執だ。愛の中で、人は、他者の存在に動かされ、不安定にさせられることを通じて、その自律的な主体としてのあり方が崩壊させられることを経験する。いわば、ここでは自他が相互浸透している。そもそも人は他者との交わりの中で生きているのだとすれば、愛においてみられるものこそが、具体的な人間の姿である。しかし、交換が社会の基調をなしているならば、具体的な姿の人間は黙殺された状態にある。ここでは、あらゆるものにおいて、抽象的で他のものと通約可能な個という課せられた「本質」が「実存」に先立つ。アドルノが「全面的な交換社会」という表現で意図しているのは、こうした事態である。

そうであるなら、個々の存在は、文字通りの意味では、確かに独自のものとして存在している。問題は、個々の存在が、交換社会の中で、交換社会に抗して、その独自性をどのように主張しうるのかということである。これをとりわけ強く主張しているものが、アドルノにとっては、芸術である。本報告では、交換と愛をめぐる議論を踏まえて、アドルノの文化論・芸術論に着目して検討を行う。

「フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』における生活世界と主観性の構造の関連について」

小島 雅史（本学社会学研究科修士課程）

我々は日常において様々な自明性を抱えている。例えば、目の前にある何かが実際にそこに存在していることもそうだ。その我々が持つ自明性の最も重要な問題として『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936、以下『危機』）でフッサールが取り上げたのが、生活世界である。生活世界とは、我々の生の地盤であり、どんな経験もその内で行われると定義される。そして、その生活世界の分析の際にフッサールは、主観性の分析と関連させる形をとっている。本報告では、生活世界と主観性の関連に注目し、何故生活世界と主観性が互いに独立に分析されるのではなく、関連の中で分析されたのかということをも明らかにする。

生活世界は上述のように、生の普遍的な地盤とされ、フッサールによれば、あらゆる認識はそこでの経験から得られたことを根拠としている。しかしその普遍性の故に、生活世界はあまりにも自明なことであり、基礎付けの役割を常に担いながらも、真に主題化されてこなかったとフッサールはいう。そこで、この生活世界の自明性を解明にもたらそうという試みが『危機』では成される。

まずその試みに際し、フッサールは判断中止という作業を行う。これは例えば、ある対象の实在を認める、といった我々の素朴な判断を保留する作業と定義される。この判断中止によって、ある妥当な認識が、如何にしてそのような妥当性を持つものとして我々の意識に現われたかという、その現われ方の構造を問い直すことが出来る。つまりフッサールは判断中止によって我々の経験の構造を解明すると共に、その経験の構造の中での生活世界の位置付けを見ようとするのである。

ポイントとなるのは、フッサールが生活世界と主観性の両者を相互規定的に論じようとした点である。

一方では主観性が如何に経験を構成するのかと問う中で、生活世界の輪郭が明らかになる。その際問題は生活世界とは何かということではなく、生活世界が所与として意識に与えられるそのあり方とはどのようなものかということに移っている。この転換は、主観性が構成する諸々の経験の構造を生活世界の分析の手引きとすることを可能にする。つまり、生活世界がどんな経験に対してもそれを基礎付けるという形で関与するが故に、それぞれの経験が生活世界の与えられ方の指標となるのである。

また他方で、生活世界のこの普遍的基礎付けの役割が、主観が構成する諸経験の統一にとって重要な役割であることが示される。何故なら、生活世界が主観と関係しているという形式が諸経験に常に保持されていることによって、生活世界が、主観の構成する諸々の経験を、単にそれぞれ個別的なものではなく、他の経験と関連付けられるための地平の役割を果たしているからである。

このように、生活世界と主観性の説明を行うためには、双方の関連が必要なのである。この点を詳細に報告することになる。

2015年6月13日に第16回大会が第3研究館にて開催されました。以下は、その時の個人研究発表の発表者のまとめと講演会のまとめです。

前回個人研究発表まとめ

**「実証哲学あるいは実証主義における科学／社会：  
サン＝シモンとその弟子コントから」**

野末 和夢（本学社会学研究科修士課程）

本発表は、クロード＝アンリ・ド・サン＝シモンとその弟子オーギュスト・コントの思想を、彼らとともに主張した「実証哲学」の側面から解釈し直し、十九世紀前半期のフランスにおける「科学」観と「社会」観の関係性についての一視座の提出を目指した。

十八世紀末から十九世紀初頭のパリでは自然科学の画期的成果が集結していた。その他方、ジャコバン主義秩序観に対抗して、国家と個人とを介在する「社会」の自律性が様々な立場の論者によって説かれていた。「科学」と「社会」とを巡る両潮流に乗りつつも、時にそれに対して批判的な立場から、十九世紀にふさわしい「哲学」を形成しようとした人物として、サン＝シモンおよびコントを本発表では位置づけた。

では、端的に「科学」と「社会」とは彼らの学説において一体どのようなものだろうか。その点について本発表では、彼らによる歴史学的・社会的理解から説明した。彼らによれば、まず「宗教」とは「科学」と同じ機能を持つものと把握される。「宗教」から「科学」へといった「世俗化」のプロセスを「近代化」に見出すのではなく、「宗教」と「科学」を、「予見 (prévoir)」という機能的レベルにおいて、イコールで結びつけることに彼らの特徴がある。経験主義的に事実の集積に没頭することや、現象に対する「客観的見地」を提出することなどは「科学」の営みではない。「科学」の営みとは他者との協働によって形成される、「主観的」営みであり、その意味において、かつての「宗教」と同質的機能を有している。ただし、彼らは「進歩」のスローガンに従って、具体的に（例えば）キリスト教カトリックの復権を目指すのではなく、「社会科学」「社会学」を発明し、自然科学の上位にそれを位置づけ、それら全体を「(実証) 科学」として体系化する。その体系化の基準として定められたのが「実証哲学」であり、この「実証的」の意味については本発表前半部で詳しく整理した。

次に、彼らが「社会」という時、そこに想定されているのは、「精神」／「世俗」の縦割り分業関係に基づく、中世ヨーロッパの「レジーム」である。中世のローマ・カトリックがそうであったように、「世俗」は「精神」に従属するのであり、ここでも「科学」＝「精神」のポジションが重要になる。そして、「科学」という主観的見地の正当化は、民衆の形成する「世論」、より平素にいうのであれば、「科学」に対する「信頼」に依存している。とくにコントは、「科学」を媒介とした「信頼」の形成に、ヨーロッパレベルの「社会」再組織化の実質的契機を見出していることを本発表後半部で確認した。

質疑応答では、大変貴重なご指摘を多数頂けたことに感謝している。要約すれば、実際に自然科学・社会科学含む「科学」は（サン＝シモンらの言うように）「宗教」に取って代わることができるのか、という非常に本質的なご指摘を頂いた。「ヨーロッパ」の「精神」というレベルにおいて、また機能上、「科学」と「宗教」は同質的であると回答したが、真に迫る回答ではなかったことを反省している。コント

は後期以降、かつて科学知を強調していたのとは反対に、「愛」「情」「慈しみ」などを「宗教」に連なる、社会の根本的要素として詳述している。「科学」／「宗教」の関係性というテーマは、「人類教」が提唱されるコント後期思想の大テーマであるが、本発表ではサン＝シモン思想との関係上、深く立ち入らなかった。この点については、今後の課題とさせていただきたい。

前回個人研究発表まとめ

## 「道徳の衝突とはいかなる現象か —ブルデュエー的 Heterarchy という見取り」

國本 哲史（本学社会学研究科修士課程）

本発表は、二つの目的を持っていた。一つが経験的倫理学における社会学的視座の必要性を提示すること。もう一つが道徳の実証的研究である道徳心理学の知見と、社会学が蓄積してきた社会理論を活用しながら、道徳の衝突という現象を説明することであった。

実際社会を根拠とし、道徳がどのように使われており、どのような役割を担っているのか。これを問うことは、自由な個人が社会的存在に移行するための媒体を明らかにするということである。何故人は既存の秩序を守るのか。何故人は時に秩序を揺るがせてでも逸脱するのか。これらは社会学の伝統的な問いである。Durkheim は、その媒体こそ道徳であると指摘した。何故なら道徳は人の行為を制約・促進する働きを持っているからである。

道徳それ自体については哲学、中でも倫理学が専門としてきた。実際社会を根拠とする以上は、報告者も経験的倫理学に属する。本発表では、経験的倫理学は実証性に欠くとし、道徳心理学がそれを満たしていると示した。しかし、道徳心理学も社会の複雑な網の目の中で生活する実践者としての個人の道徳を十分には捉えられていないとして、道徳社会学の必要性を提起した。社会学は実践者の関係の網の目を見るための観察方法、分析方法を発展させてきている。それを応用して社会的存在者としての実践者の道徳を聞き取り、分析していくべきであるということである。

ここで、心理学も社会性を取り入れた実験を試みているというご指摘をいただいた。当日は満足のいく回答はできず、心理学についてさらに研究すべきであるとの認識を正すことができた。しかしながら、権力や規範など、社会的な力は経験や場所によって多様であり、ある道徳的命題の選択に影響を与える可能性があるそれらの力を捉えようとする、ライフストーリー法や参与観察といった調査を、道徳の科学的な研究に取り入れることの重要性は変わらずに存在するだろう。

また、本発表では道徳を構築主義的な社会的体系であると定義した。社会における歴史的な経験や、対外・対内状況などの変化によって「～すべき」は変化する。「～すべき」の集合としての道徳体系は、その点で、時代や空間に相対的である。個々人は、そこから J.Haidt が示した「道徳的感情」に従って、道徳的命題を選択する。選択された彼らの道徳的命題群は、道徳的感情によって裏打ちされているため、道徳的な対立は感情的な対立へと行きついてしまう。

たとえば昨今の安全保障政策について考えてみる。道徳的命題「社会的弱者が最も損をするような政策を取るべきではない」（ケア）と「他国の脅威に対して自国を守らなければならない」（忠誠）は安保法制において対立する。このように、道徳はそれぞれ（価値）合理的であっても対立し得る。道徳的な

信念に対立する相手に対しては嫌悪感が生じると考えられる。つまり道德の衝突は、一方が非合理的で誤っているというわけではなく、お互いがそれぞれ合理的な正しさを有しながらも、道德的感情を伴う対立に陥りがちになる現象だとする見方を本発表では提示した。

ここでは、道德の説明に道德的感情を持ちだしてくるのは循環論法ではないか、と質問していただいた。それに対しては、道德基盤という道德的感情の生起をもたらす基盤があり、これも構築主義的に成立するとすることによって循環を回避していると説明した。構築のプロセスを解明することは今後の課題である。

その他にも数多くの有益な質問をいただいた。疑問が生じるポイントを把握し、丁寧に論じなければならぬ箇所を把握できた。

前回個人研究発表まとめ

**「哲学的意味論における文脈主義と相対主義  
——不一致の取扱いをめぐって——」**

鈴木 慧（本学社会学研究科修士課程）

本発表は、分析哲学領域における文脈主義-相対主義論争の中の、1 論点である不一致 disagreement をめぐる議論に寄せて近年文脈主義陣営の側から提出されてきている文脈主義にとって有利な諸論証に注目し、これに対し批判的議論を展開した。

近年、分析哲学領域では、発話文脈の諸特徴に依存して外延を変化させるように見える言語表現（時制文・趣味述定文・道德文等々）に対しいかなる意味論的取り扱いを与えるべきかをめぐり、文脈主義という立場と相対主義という立場との間に論争が展開されている。この論争は、Recanati (2007) や Kölbel (2015) の整理によれば、ある言語表現の外延が発話文脈特徴に依存して変化するという現象を、その言語表現の内容 content が発話文脈の諸特徴に依存して変化することの帰結として説明するのか（文脈主義）、それともその言語表現の不変の内容が評価環境内の諸パラメタに相対的に外延を変化させることの帰結として説明するのか（相対主義）という 2 立場間の対立である。

この論争での 2 陣営間の係争点は複数存在するが（cf. MacFarlane 2014; Kölbel 2015）、その中でも主要ものの 1 つは、不一致を呈しているように見える対話の取り扱いというトピックである。複数の相対主義者たちは、「趣味述定文等についての文脈主義意味論は、対話参加者のうちの一方が「否」等の「不一致マーカー」の使用を許容されているように見える対話を、不一致マーカーの使用が許容されないように見える対話と意味論的等価であると予測しなければならない（それゆえ、文脈主義意味論は趣味述語等に関して誤りである）」という類の文脈主義反対論証を提起してきた（Kölbel 2004; Lasersohn 2005; MacFarlane 2007）。だが、この論証に対しては近年、文脈主義陣営から次のような応答が提出されてきている。すなわち、「文脈主義者は、趣味述定文等を用いた対話を、不一致マーカーの使用を許容されるような対話と意味論的に等値するような予測を与えることもできる（したがって、相対主義者による上記様の文脈主義批判は当たっていない）」という応答である（Sundell 2011; Huvnes 2012）。

本発表では、文脈主義-相対主義論争における不一致というトピックをめぐる近年における上述のごとき議論の進展を背景に、次のような主張を行った。すなわち、近年の Sundell (2011) および Huvnes



(2012) による文脈主義に有利な 2 応答は、相対主義の比較優位を突き崩すものではない。この主張の論拠を挙げるべく、発表者は、Sundell (2011) と Huvenes (2012) が「x はおいしい」のような趣味述定文について提案している意味論的同一視に問題があることを指摘した。すなわち、彼らは当該趣味述定文を、それぞれ「x は私とあなたとが共有する趣味基準においておいしいとされている」(Sundell)、および「私は x を好む」(Huvenes) と意味論的におおむね同一視するが、その同一視には問題がある。このことを発表者は、いくつかの事例を挙げて論証した。

上記発表内容に関して、会場からは次のようなコメントを頂戴した。すなわち、Sundell (2011) の論は発表者が指摘した点以上に、「立ち聞き事例」の処理にまずは難渋するのではないかと、というコメント、また、趣味述定文等の外延が可変的であるという現象は、文脈主義でも相対主義でもなく、何らかの非命題主義的な意味論によってこそもっともよく説明されるのではないかと、といったコメント、等である。これらのコメントを通して、会場での討議では、発表者の議論の暗黙の前提や見落とし・限界がより明らかになった。

前回講演会まとめ

## イスラームにおける主体性の錯綜 - 「シャルリ・エブド事件」から考えるべきこと

鵜飼 哲 (一橋大学教授)

2015年1月7日にフランスの首都パリで起きた風刺新聞社襲撃事件は、この惨劇に至る過程を含め、きわめて複雑な出来事であった。「表現の自由」を原則とする近代的、民主的な社会と、それに敵対する前近代的な宗教共同体思想の激突などという安易な図式では、到底その本質をつかむことはできない。

この事件を正確に理解するためには、一方でフランス共和制と「宗教」の特異な諸関係が「非宗教性」(laïcité) という概念の再検討を通して再考されなければならないし、他方ではイスラームという信仰共同体について内面的かつ歴史的な認識が求められる。ここではイスラームの側に焦点を絞り、チュニジア出身の精神分析家フェティ・ベンスラーマの仕事を中心に参照しつつ、基本的な論点の整理を試みる。

事件の数ヶ月前に出版された『イスラームにおける主体性の戦争』に至るベンスラーマの仕事は、イスラームの起源に関する精神分析的解釈を軸に、現代のアラブ＝イスラーム世界の動向に積極的な介入を試みてきた。その特徴は「理論」としての精神分析を「対象」としてのイスラームに単純に適用するのではなく、ユダヤ＝キリスト教的出自をもつ精神分析とイスラームを、相互的な試練にかける独自のアプローチにある。

ベンスラーマによれば、「宗教原理主義」と規定される現代イスラーム世界の信仰生活の変容は、ある社会の創設的行為の忘却に起因する居心地の悪さへのひとつの応答として理解すべきものである。西洋諸国の植民地支配、政治的独立、そして近代化の波に洗われるなかで、イスラーム世界はその信仰的基

盤の喪失という社会的感情に襲われた。そのとき、起源への原義的回帰の欲望が現れる。それは聖典(『クルアーン』)の直解的解釈によって、預言者在世中の純粋なイスラームを回復しようとする欲望であり、預言者没後の歴史のすべてを否定しようとする傾向を持つ。

このような動向には歴史的必然性があり、そのメカニズムを正確に理解しなければならない。ベンスラーマによれば、このような起源への原義的回帰の欲望には、起源への転義的回帰の可能性を示すことによって応じる必要がある。それは信仰共同体の創設的行為を、歴史の進展に応じて新たな可知性のなかに書き込み直し、そのことによって記憶を新たな生成に向けて解放することである。西暦7世紀に成立したイスラームはアブラハム一神教のなかで最後に誕生した世界宗教であり、その起源に関する記録は豊富に存在する。イスラームの起源とは、ユダヤ教、キリスト教など先行する一神教の創設神話の独創的な解釈による反復にほかならず、起源への転義的回帰は、このような起源の経験を反復することでもある。

初期のベンスラーマの仕事は、フロイトによるイスラームについての短い言及の含意の検討をひとつの柱にしていた。『人間モーセと一神教』のある注でフロイトは、「イスラームはユダヤ教の短縮化された反復」であるが、「創設者の殺害が起きなかったことが急速な文明的発展を可能にし、またそれを中断もした」と断じている。このフロイト説に対してベンスラーマは、「<一>であり、欠けるところなく、生みもせず生まれもしない」(『クルアーン』、112章1-4節)と言われるように、イスラームにおいて神の名は、生殖=家族的隠喩系から殊更に断絶しており、預言者もまた、信徒たちの<父>とはみなされないという点を強調する。

また、聖書・創世記のアブラハムによるハガルとイシュマエルの追放はアラブ民族の起源譚でもある。ベンスラーマはこの「起源の離縁」の説話を重視し、事実上の神の子であるイサクからイエスへ、男子の「霊による誕生」の系譜がたどられるユダヤ=キリスト教に対し、イシュマエルが「肉による誕生」であることを重視する。そして、創世記の登場人物のなかで母のハガルのみが『クルアーン』に不在であるという事実、「イスラームの制度はそれを一神教の記憶に系譜的に節合する端緒となる女性の否認のうえに成立した」ことを読み取っている。

イスラームには伝統的に主体性の問いがあった。ギリシャ哲学の<ヒュポケイメノン>は、イスラームのなかに、哲学的な「基体」と神学的な「従属」に分岐しつつ継承された。また、イブン・アラビーの『叡智の台座』には「その重力の中心が<他者>の欲望である主体」が素描されており、ラカン派精神分析で言うところの無意識の主体に近い発想が見出される。

しかし、19世紀以降の啓蒙主義的西洋による征服・植民地支配は、イスラームの核心に、文明的「基軸の歴史的破砕」と呼ぶべき外傷をもたらした。それは「時間、知、真理、主権、享楽といった基本的関係をめぐる分岐のプロセスの結果として、共通の基体がさまざまに分離」していく危機的な状況である。

ナポレオンのエジプト遠征以降、西洋的近代のイスラーム世界への導入を図る啓蒙派の知識人運動が起こる。この潮流はイスラーム的理想を堅持しようとしたが、結果的に生じたのは共同体的実体からの主体の分離であり、脱同一化であった。だが、やがて西洋による植民地支配が啓蒙的理想の裏切りであることを見て取ったイスラーム知識層は、伝統への回帰の道を取ることになる。しかし、このような共同体的理想との再同一化が不可能であるがゆえに、超自我による主体の問責の機制が発達していく。また、民衆のイスラームは理解不可能な事態に直面し、共同体の自我の防衛を求めて返って自己を毀損す

ることになる、「自己免疫的待望」の体制を取る。

啓蒙主義に対するこのような反動が伝統の固守、伝統への回帰を目指したのに対し、ベンスラーマが「反啓蒙」(anti-Lumières)と呼ぶ潮流は、イスラーム的伝統のなかの合理主義的遺産とのラディカルな断絶を唱えることになる。それはアラブ哲学の思弁と断絶し、さらには聖典の神学的解釈までも拒否するに至る。トルコのカリフ制の廃止(1924)に対する反応として、1929年エジプトにムスリム同胞団が結成される。1960年代のその有力な思想的指導者であったサイイド・クトゥブは、『クルアーン』に含まれる絶対的理性以外の中立的な理性を認めず、「少しでも哲学が入るとイスラームの純粋な源泉に毒が盛られる」と主張した。ここで起きている事態は、ベンスラーマによれば、共同体の理想への「脱同一化でも再同一化でもなく、共同体の超自我への超同一化」なのである。

聖戦主義と呼ばれる<殉教>思想は、独立戦争、脱植民地化過程を含め、イスラームの歴史上前例がないものであり、1980年代以降急速に発展した。この思想を駆動させているものはまさにこの「共同体の超自我への超同一化」であり、宗教原理主義の暴力の巨大さは、超自我に固有の残酷さにその源泉がある。「シャルリ・エブド」事件についても、このことの認識抜きに「テロリズム」を非難するだけでは、適切な対応を取ることはできない。とはいえ、イスラーム世界のなかにはこれとは別の主体性の形成の萌芽も観察される。2011年初頭からの「アラブの春」の参加者が尊厳と正義の要求を掲げたとき、そこに神、宗教、導き手といった古来の名は不在だったのである。

## 平子友長先生の研究業績

### A. 著書（単著）

(1991)『社会主義と現代世界』青木書店

### B. 著書（共編著）

(2013)「マルクスのマウラー研究の射程—MEGA 第 IV 部門第 18 卷におけるマルクスのマウラー抜粋の考察—」および「あとがき」、大谷禎之介、平子友長（編）『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』桜井書店、pp.217-257, pp.339-345.

### C. 共著

(1979)「マルクスの経済学批判の方法と形態規定の弁証法」、岩崎允胤（編）『科学の方法と社会認識』汐文社、pp.109-172.

(1983)「実践の哲学—グラムシ」、唯物論研究協会（編）『哲学を学ぶ人のために』白石書店、pp.286-289.

(1984)「近代市民社会理論の問題構成」、佐藤和夫（編）『市民社会の哲学と現代』青木書店、pp.200-238.

(1989a)「現代社会における人間の＜豊かさ＞—史的唯物論の豊富化のために」、東京唯物論研究会（編）『豊かさを哲学する』梓出版社、pp.186-234.

(1989b)『『資本論』の弁証法の基本性格—転倒の論理—』、岩崎允胤ほか（編）『弁証法と現代』法律文化社、pp.108-142.

(1997)「解説 マルクスとヴェーバー」、『高島善哉著作集 第7巻 マルクスとヴェーバー』こぶし書房、pp.451-489.

(2000a)「社会科学の方法意識 『マルクスとヴェーバー』の意義について」、渡辺雅男（編）『高島善哉 その学問的世界』こぶし書房、pp.122-154.

(2000b)『『資本論』の弁証法』、服部文男、佐藤金三郎（編）『資本論体系 第1巻 資本論体系の成立』有斐閣、pp.354-371.

(2006)「戦前日本マルクス主義の到達点—三木清と戸坂潤—」、山室信一（編）『岩波講座 「帝国」日本の学知 第8巻 空間形成と世界認識』岩波書店、pp.111-155.

(2007)「西洋近代思想史の批判的再検討—カント最晩年の政治思想におけるロック批判の脈絡—」、川越修他編『思想史と社会史の弁証法』御茶の水書房、pp.5-30.

(2008)「三木清と日本のフィリピン占領」、清真人、津田雅夫、亀山純生、室井美千博、平子友長著『遺産としての三木清』同時代社、pp. 303-363.

(2009)「ハバーマス『カント永遠平和の理念』批判」、藤谷秀・尾関周二・大屋定晴（編）『共生と共同、連帯の未来』青木書店、pp. 64-84.

(2013)「戦前日本マルクス主義哲学の遺産とそのアクチュアリティ—三木清と戸坂潤—」、岩佐茂・島崎隆・渡辺憲正（編）『戦後マルクス主義の思想 論争史と現代的意義』社会評論社、pp.224-251.

(2015a)「戸坂潤における実践的唯物論構想」、藤田正勝（編）『思想間の対話 東アジアにおける哲学の受容と展開』法政大学出版局、pp.240-258.

(2015b)「第1章 廣松版の根本問題」、「第4章 デジタル版編集の合意事項」（いずれも大村泉、渋谷正との共同執筆）、大村泉、渋谷正、窪俊一（編著）『新MEGAと『ドイツ・イデオロギー』の現代的探求』八朔社、pp.19-51, pp.76-79.

#### D. 論文（和文）

(1976)「マルクスにおける共産主義理念の形成とその科学的基礎づけ」、『哲学の探求』第4号、pp.32-49

(1977)「マルクスの経済学批判の方法と弁証法」、東京唯物論研究会『唯物論』第8号、1977年11月、pp.43-70.

(1980)「マルクスの経済学批判の展開方法」、『経済理論学会年報』第17集

(1984a)「疎外論と物象化論」、『経済理論学会年報』第21集

(1984b)「ヘーゲル『精神現象学』における疎外論と物象化論（1）」、北海道大学『経済学研究』第34巻2号、1984年9月、pp.37-49.

(1985)「直接的生産過程における疎外論の発展」、札幌唯物論研究会『札幌唯物論』第30号、pp.3-18.

(1995)「バーガー『社会学への招待』の批判」、『現代社会理論研究』第5号、人間の科学社、pp.57-73.

(1996)「日本人の時間理解—ひとつの比較文化論の試み」、『一橋大学社会学部特定研究 地域社会の国際化』、pp.5-21.

(1996)「アナル派の歴史学と歴史哲学の可能性」、『唯物論研究年誌』創刊号、40-69.

(1997)「歴史における時間性と空間性—和辻哲郎、ハイデガーおよびブローデル—」、北海道大学『経済学研究』第47巻2号、pp.188-202.

(1998a)「和辻哲郎の風土論における日本認識とオリエンタリズム」、『共同探求通信』第13号、pp.88-99.

(1998b)「市民社会概念の歴史」、『法の科学』（民主主義科学者協会法律部会）第27号、pp.191-196.

(2000)「解釈学の批判的継承に向けて」、一橋大学研究年報『社会学研究』第38号、2000年1月、pp.131-210.

(2002a)「三木清の思想のアクチュアリティ」、『共同探求通信』第19号、pp.2-16.

(2002b)「三木清『構想力の論理』の論理構造』、『共同探求通信』第19号、pp.136-176.

(2003)「ステイト・ネイション・ナショナリズムの関係—一つの理論的整理」、唯物論研究協会『唯物論研究年誌』第8号、pp.41-71.

(2004)「グローバリゼーションという現実—哲学に突きつけられた課題」、日本哲学会『哲学』第55号、2004年4月、pp.4-19.

(2005a)「三木清と読書」、一橋大学研究年報『社会学研究』第43号、pp.95-142.

(2005b)「今日の環境問題の本質と環境哲学の課題」、『一橋論叢』第133巻4号、pp.119-13

(2005c)「ベンヤミン『歴史の概念について』最初の六テーゼの翻訳について」、立命館大学国際関係学会『立命館国際研究』第18巻1号、pp.1-22.

(2005f)「カント『永遠平和のために』のアクチュアリティ」、東京唯物論研究会『唯物論』第79号、pp.27-42.

(2007a)「西洋における市民社会の二つの起源」、一橋大学大学院社会学研究科『一橋社会科学』創刊号、pp.23-66.

(2007b)「廣松渉版『ドイツ・イデオロギー』の根本問題」、マルクス・エンゲルス研究者の会編集『マルク

- ス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 48 号、八朔社、pp. 97-121.
- (2009a) 「近代自然法思想の再評価—自然法と先住民問題—」、名古屋哲学研究会『哲学と現代』第 24 号、pp. 37-50
- (2009b) 「MEGA 第 1 部門第 5 巻付録『ドイツ・イデオロギー』CD-ROM 版の編集」、マルクス・エンゲルス研究者の会（編）『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 51 号、八朔社、pp. 79-98
- (2010) 「昭和思想史におけるマルクス問題—『ドイツ・イデオロギー』と三木清」、日本哲学史フォーラム（編）『日本の哲学』第 11 号、昭和堂、pp.92-105
- (2013a) 「マルクス物象化論の基礎カテゴリーとその理論構成」、環境思想・教育研究会（編）『環境思想・教育研究』第 6 号、pp.107-113
- (2013b) 「ザスーリッチへの手紙」、『季報 唯物論研究』第 124 号、pp.120-134
- (2013c) 「三木清『構想力の論理』における構想力の概念とその活用」、日本哲学史フォーラム（編）『日本の哲学』第 14 号、昭和堂、pp.62-76
- (2014a) 「三木清の思想の基本構造と問題点」、『季論 21』第 24 号、pp.169-179
- (2014b) 「ミヒャエル・ハインリッヒによる『資本論』の新しい読み方—『価値の科学』の論理構造」、唯物論研究協会『唯物論研究年誌』第 19 号、pp.163-177

## E. 論文（欧文）

- (1983) Versachlichung und Verdinglichung in ihrer Beziehung zur Hegelschen Dialektik. Zur Erschliessung der Logik der Verkehrung, Hokudai Economic Papers, Vol.12, pp.65-85.
- (1985) Versachlichung und Verdinglichung in der Phänomenologie des Geistes Hegels, Hokudai Economic Papers, Vol.14, pp.93-110.
- (1987) Der fundamentale Charakter der Dialektik im Kapital. Zur „Logik der Verkehrung“, S. Boenisch, F. Fiedler, Ch. Iwasaki (hrsg.), Marxistische Dialektik in Japan. Beiträge japanischer Philosophen zu aktuellen Problemen der dialektisch-materialistischen Methode, Dietz Verlag Berlin, S.105-123, S.237-242.
- (1990a) Bürgerliche Gesellschaft und Staat. Untersuchungen zur Klassischen Politischen Theorie der Moderne, Economic Journal of Hokkaido University, Vol. 19, pp.53-85.
- (1990b) Die Grundzüge des japanischen Faschismus und die Kriegsverantwortlichkeit japanischer Philosophen während der Kriegszeit, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol. 22-1, pp.19-25.
- (1992) Die Modernisierung Japans und die Modifikation der Tradition. Kritik an Tominagas „Modernisierungstheorie“, Mesotes. Zeitschrift für philosophischen Ost-West-Dialog, Wien, S.294-311.
- (1993) Die rationale Betriebsführung und die Produktivkraft des Kapitals, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.25, No. 1, pp.7-23.
- (1996) Time and Temporality from a Japanese perspective, D. Tiemersma and H.A.F. Oosterling (eds.), Time and temporality in intercultural perspective, Editions Rodopi B.V., Amsterdam, pp.93-104.
- (1997) Materialismus und Dialektik bei Marx, Friedrun Quaas u. Georg Quaas (hrsg.), Elemente zur Kritik der Werttheorie, Peter Lang, Berlin. S.35-51.
- (2000) Zeitlichkeit und Räumlichkeit in der Geschichte: Watsuji, Heidegger und Braudel, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol. 41-1, pp.17-26.

- (2002) Philosophy and Practice in Marx, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.34-2, pp.47-57.
- (2003) Marx on Capitalist Globalization, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.35-1, pp.11-16.
- (2003) Zeitlichkeit und Räumlichkeit im Hinblick auf die traditionelle japanische Zeitmessung, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.35-2, pp.47-62.
- (2004) Contradictions of Contemporary Globalization: How Socialist Philosophy Should Cope with it? 北京大学鄧小平理論研究中心編 (趙存生、王東 主編) 『鄧小平与当代中国和世界』北京大学出版社、pp.707-724.
- (2005) Contradictions of Contemporary Globalization: How is Socialist Philosophy to cope with it? Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.37-2, pp.53-62.
- (2008) Die Grundfehler der Hiromatsu-Edition der Deutschen Ideologie. Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.40-1, pp.59-72.
- (2009) Die neuesten Tendenzen der „Deutschen Ideologie“ Forschung in Asien – Das Internationale Symposium in Nanjing und die chinesische Übersetzung der japanischen Hiromatsu-Ausgabe der „Deutschen Ideologie“ –, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol. 41-2, pp.49-57.
- (2010a) Neue Wende der Geschichtsauffassung von Marx nach 1868 - Seine Auseinandersetzung mit Maurer – (the first version), Hamid Reza Yousefi, Hermann- Josef Scheidgen, Henk Oostering (Hrsg.), Von der Hermeneutik zur interkulturellen Philosophie. Festschrift für Heinz Kimmerle zum 80. Geburtstag. Verlag Traugott Bautz, Nordhausen. S.195-210.
- (2010b) Die Wende in Marx' Geschichtsauffassung nach 1868 – Seine Auseinandersetzung mit Maurer – (the second improved version). In: Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol. 42-2, pp.25-35.
- (2010c) Neue Akzente von Marx' Forschungen nach 1868 – Exzerpte aus den Werken von Georg Ludwig von Maurer, Carl-Erich Vollgraf, Richard Sperl und Rolf Hecker (Hrsg.), Beiträge zur Marx- Engels- Forschung Neue Folge 2010. Das Kapital und Vorarbeiten Entwürfe und Exzerpte, Argument Verlag, Hamburg. S.157-171.

## F. 論文 (中国語)

- (2005) 「当今環境問題の本質及環境哲学的課題」、Yuanzheng Pang (編) 『全球下背景の環境與發展』当代世界出版社、pp.3-35.
- (2006) 「馬克思關於資本主義全地球化的論述」、全国中文核心期刊他 (編) 『馬克思主義与現實』2006 年第 5 期、pp.46-49.
- (2007) 「馬克思对資本主義認識的嬗變」、楊春貴主 (編) 『中日学者論馬克思主義哲学的当代形態』中共中央党校出版社、pp.89-105.
- (2007) 「MEGA2 第 I 部門第 5 卷付録『德意志意識形態』CD-ROM 版的編集問題」、全国中文核心期刊他 (編) 『馬克思主義与現實』2007 年第 6 期、pp.59-72.
- (2010) 「梁贊偌夫版<<德意志意識形態>>和三木清」、清華大学 『<<德意志意識形態>>文学学及其思想研究会 議論文集』、pp.78-85
- (2012a) 「黑格尔<<精神現象学>>中的“Versachlichung”和“Verdinglichung” (李乾坤訳)、張一兵 (主編) 『社会批判理論紀事』第 5 輯、江芳人民出版社、pp.230-245.
- (2012b) 「物象化 (Versachlichung) 与物化 (Verdinglichung) 同黑格尔弁証法的聯系 (李乾坤訳)、張一兵 (主編) 『社会批判理論紀事』第 5 輯、江芳人民出版社、pp.211-229.

- (2013)「馬克思的毛勒研究—対 MEGA IV/18 卷馬克思的“毛勒摘録“的考察」『哲学動態』2013 年第 12 期
- (2014a)大村泉、渋谷正、平子友長「新 MEGA『德意志意識形態』之編集与広松版的根本問題」(彭曦訳)、叢本、韓立新他編集『当代学者視野中的馬克思主義哲学 日本学者卷』北京師範大学出版社、pp.452-479.
- (2014b)「“物象化”与“物化”同黑格尔弁証法的聯系」(李乾坤訳)、叢本、韓立新他編集『当代学者視野中的馬克思主義哲学 日本学者卷』北京師範大学出版社、pp.507-520.

#### G. 論文 (韓国語) (降順)

- (2012)타이라코 토모나가 (平子友長)「제 10 장 소화 (昭和) 사상의 마르크스 문제—『독일 이데올로기』와 미키 키요시 (三木清) —」、이광래·후지타 마사카쓰 편『서양철학의 수용과 변용 -동아시아의 서양철학 수용의 목제-』경인문화사、pp.207-226 (韓国語)、pp.396-413 (日本語) (李光來·藤田正勝編『西洋哲学の受容と変容—東アジアにおける西洋哲学受容の問題—』景仁文化社)

#### H. 翻訳

- (1978)共訳 (資本論草稿集翻訳委員会訳) マルクス『資本論草稿集』第 4 卷「経済学批判 (1861-1863 年草稿) 第 1 分冊」大月書店
- (1981)共訳 (資本論草稿集翻訳委員会訳) マルクス『資本論草稿集』第 1 卷「1857-1858 年の経済学草稿 第 1 分冊」大月書店
- (1984)共訳 (資本論草稿集翻訳委員会訳) マルクス『資本論草稿集』第 3 卷「経済学草稿・著作 1858-1861 年」大月書店
- (2001)共訳 (中村好孝との共訳) エレン・メイクシス・ウッド『資本主義の起源』こぶし書房
- (2015)共訳 (平子友長監訳、明石英人、佐々木隆治、斎藤幸平、隅田聡一郎訳) ケヴィン・B・アンダーソン『周縁のマルクス』社会評論社



# 一橋大学哲学・社会思想学会 個人研究発表募集のご案内

2015年11月16日

2016年夏大会の個人研究発表を下記の通り募集します。会員の皆様の日ごろの研究成果の発表の場として奮ってご応募ください。

## 【募集内容】

- 1) 第19回大会（2016年6月第1土曜予定）の個人研究発表
- 2) 発表形式 Aタイプ：90分（発表時間45分、質疑応答時間45分）  
Bタイプ：60分（発表時間30分、質疑応答時間30分）  
いずれも、任意のテーマ。
- 3) 募集人数 若干名（査読あり）※下記の採択基準参照のこと。
- 4) 募集期間 2016年1月12日（火）～ 同年1月31日（日）まで
- 5) 応募資格 本学会会員に限る（哲学・社会思想ゼミ生は会員。詳細は会則参照のこと）。

## 【応募方法】

発表希望者は、下記の必要事項を「学会発表申込書」としてA4用紙に記入、募集期間内に学会事務局までご提出ください（メールでの応募可）。

- 1) 氏名・フリガナ
- 2) 所属研究科・学年・所属ゼミ（課程修了者は出身ゼミと現在の所属）
- 3) 発表タイトルと発表要旨（1200字以内）
- 4) 発表形式の希望（AまたはB）  
発表希望者は、AタイプまたはBタイプのいずれかを選択してご応募ください。  
ただし、当日の時間の都合上、こちらで調整する場合があります。
- 5) 連絡先メールアドレス（メールを使用しない場合は、住所と電話番号）

## 【提出先】

メール送信先 phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp （事務局メールアドレス）

郵送先 〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学社会学部社会思想共同研究室気付  
一橋大学哲学・社会思想学会 事務局あて

## 【採択基準】

1. 主題が明確であること。また、背景説明によりその意義を示すこと。
2. 主題に取り組む着眼点、アプローチを明確にすること。
3. 何をどこまで議論するのかを明確に示すこと。

応募結果は3月中にお知らせします。